レボルーション・エース

海堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
レボルーション・エース

【Ｎコード】
Ｎ２９７９Ｄ

【作者名】
海堂

【あらすじ】
時は、２０ＸＸ年。ある国と国が戦争をしていた。そして一つの国がある研究をしていた。それは、【少年少女】の【自由】と【人権】を無視した悪夢のような実験だった。この実験を成功させて、勝利しようとするなか、ある研究員が【革命】を起こそうとしていた。そしてこの物語はその【革命】に携わろうとする【少年少女】の成長の物語である。

プロローグその1

深い深い森の奥。ジャングルのように入り組んでいる森の中を進んで行くと、目の前に突然、白い建物が現われた。その建物の扉は固く閉ざされており、外からは決して開ける事が出来なかった。意味もなく建物が立っているかのように思えるが、その建物には【秘密】があったのだ。

部屋の中には、二人の男がいた。一人は白衣を見にまとい、黒い髪に黒い瞳を持つ青年だった。胸にはネームプレートが付けられてあり、ローマ字で【ＫＡＯＲＵ・ＳＩＩＮＡ】もう一人の男は茶色い机に座り、灰色のスーツを着ていた。白髪交りの髪に顎髭を生やした男は青い目を鋭く尖らして書類を見ていた。

「今日の成果はこれだけか？【シーナ】君。」

男が書類を机に置くと、最初と同じ鋭い目を【シーナ】と呼ばれた青年に向けた。【シーナ】は緊張しながら、男の問いに答えた。

「この頃、【彼ら】の精神状態が芳しくないのです。」

「それは【君達】が、悪いんじゃないのか？【彼ら】は皆、優秀だぞ？」

「し、しかし・・」

「君は、【スポーツ】には何が必要かわかるかね？【優秀な選手】？【優秀な監督】？【自分に合う道具】？どれも大事だな。しかし、これらよりも最も大事な物があるんだ。」

男は立ち上がり【シーナ】に近付くと顔を近付いた。男の鋭い目がまるで、【狼】が獲物を睨むように、ギラギラと光っていた。

「・・・・それは【結果】だ。幾ら【優秀な人材】や【道具】があっても【結果】を出せなければ、意味が無いのだよ。【シーナ】君。」

「・・・はい。」

「だったら！早く【結果】を出して来い！こんな物を見せる為に来たのではあるまい！早く行け！」

「は、はい！失礼しました。」

【シーナ】が慌てて部屋から出て行った後、男は机に戻り、椅子に座った。未だにギラギラしたその目を隠すように手を当てると、男

は小さく囁いた。

「早く・・・【結果】を出すんだ。でないと、【我々】はこの【戦争】に負けてしまうのだよ。」

◆◇◆

【シーナ】は慌てて、部屋から出た。額から汗が滲み出ている事に気付いて、どれくらい緊張していたのかが、一目でわかった。

「こっちだって・・・好きでやっている訳じゃないんだ。」

【シーナ】は小さく囁くと、長い廊下を歩いて行った。すれ違う同僚達からも励ましや、同情の言葉をかけられながら、【シーナ】はある部屋の中に入って行った。

「ハァ・・・」

部屋の中は狭く、至る所に資料が山積みに積まれており、【シーナ】はそこにある椅子に座ると、深くため息を付いた。

「・・・こんなんじゃ無かったんだ。俺のやりたかった事は・・」

【シーナ】は一つの書類を手に取り、眺めていた。その書類にはびっしりと人の写真が等間隔に貼られていた。その下には、名前が書かれていて【シーナ】はそれをジッと見ていた。

「こんな・・・何も知らない【子供達】に・・・・僕は・・僕は！」

【シーナ】は顔を腕の中に埋めると、泣き始めた。自分の犯している【罪】が【シーナ】を重く、のしかかっていた。しかし、【シーナ】は既に【準備】をしていた。それは【シーナ】自身始めてやる【革命】だった。

◆◇◆

俺は自分の【母親】を知らない。
正確に言えば、【俺達】は研究所で保存されていた【卵子】と【精子】を【受精】させて作られた【人間】なのだ。
この事を知っているのは俺だけで、俺は【シーナ】と名乗る黒髪の男にそう教えられた。他にも、【世界の歴史・地理】【数学】【科学】【医学】等、数えられないほどの知識を【俺だけ】に教えてくれた。
その中で【格闘技】については熱心に教えてくれた。
お陰で俺は様々な知識を得て、格段に強くなった。
しかし、何故【俺だけ】に教えてくれるのか訪ねると【シーナ】は俺に只一つ、【何も知らないで生きるのは、死ぬほどきついんだ。だから君だけでも知って欲しいんだ。君は賢い子だから・・・これから起きる事に役立てて欲しいんだ。】と言ったのだ。最初、俺は【シーナ】の言っていた言葉を理解出来なかった。

♪

此所は【ホワイト・ハウス】。
アメリカ合衆国にも同じような所があるが、違う。
此所は地下にある施設で、入口は地上にある【白い建物】しかない。
それに、地上に出てもそこに広がるのは、ジャングルのように入り組んでいる森があって、人間は生きて此所から出られないのだ。
これも【シーナ】から教えてもらった事だ。
そして、此所【ホワイト・ハウス】には俺と同じ平均年齢１０歳の【子供達】が数百人、個別に【閉じ込められている。】皆、足首までの長さの白い服を来ていて、研究員は【俺達】。を【ホワイト・チルドレン】と呼んで、可愛がってくれていたが、

【俺達】は怯えていた。
何故なら、【俺達】は日が経つにつれ【徐々に消えていくのだ】。
毎日毎日、連れて行かれる【仲間】を【俺達】は黙って見るしかなかった。
部屋の中から罵声を浴びせる者もいたが、その【仲間】も翌日には居なくなるのだ。
【俺】はこの時、まだ【シーナ】と出会っていなかったので、何もわからず怯えていた。【俺】の番になった時も部屋から【仲間】が覗いていて、【俺】はその刺さるような視線に耐えるようにして連れて行かれた。廊下を右に曲がり左に曲がり辿り着いた所は、異様な空間が漂う部屋が続く【研究室】だった。左右に続く部屋の一つには、【研究員】が薬を調合している部屋だった。反対側には【俺】の【仲間】が頭の中身をだし、そこに何か管のような物をはめられた状態で、ベットの上に横たわっていた。何故かわからないが、【俺】は止りその光景を凝視していた。その時、何故【俺】は凝視していたのか【今なら解る】。俺は【仲間】の姿を自分に重ねて、怯えてしまい足が動かなかったのだ。研究員が【俺】の腕を掴んだ時【俺】は体を震え、研究員を見た。研究員は無表情のまま俺の腕を引っ張り急ぎ足で歩き始めた。【俺】はあの時、どんな表情をしていたのか。
恐怖で顔をゆがませていたのか。
もしかしたら、【俺】もあの研究員のように無表情のまま見ていたのか。
今となっては、もうわからない。
その後も部屋はあったが、【俺】はどんな部屋だったのか思い出す事が出来なかった。
そして、【俺】はある部屋に連れて行かれた。
そこにいた研究員は皆、分厚いマスクを付けているその部屋には、様々な液体が並べられていて、注射器がベットの横に置かれていた。
【俺】は研究員にそのベットに寝かされると、透明な液体が入って

いる注射器を腕に刺された。体の中に注入されていくと、【俺】は突然、睡魔に襲われた。体が重くなり、【俺】はそのまま眠ってしまった。久し振りの眠りに、闇の中を潜るように【俺】の意識は途絶えた。

♪♪

【俺】が目覚めた時、そこは【俺】の知らない部屋だった。前に居た所は、薄暗く不気味な部屋だったが、此所は逆に天井の灯が眩しく、タイルや壁が白く輝いていた。

「此所は・・・」

俺はベットから降りようとしたが、うまく足に力が入らず、倒れてしまった。
タイルは冷たく【俺】の体温　を徐々に奪っていった。
その時、部屋の扉が開く音がして二人の研究員が入って来た。一人は、眼鏡をかけた清楚な雰囲気が漂う研究員と、もう一人は髪と瞳が黒く、大人というより青年のような幼さがある研究員だった。その研究員は、倒れている【俺】に手を差し伸べた。【俺】はその手を掴むと足に無理矢理力を入れて、何とかベットに戻る事が出来た。

「大丈夫かい？何処か具合は悪くないかい？」

「・・・大丈夫です。」

「そうか、ならいいんだ。怖かったろう？だけど、もう大丈夫だから安心してくれ。」

「・・・はい」

「【シーナ局長】。ちょっと・・・」

【シーナ】と呼ばれた研究員をもう一人の研究員が呼んだ。【シーナ】は【俺】に待ってねと言って、壁に寄り掛かっている研究員の所に行き、何やら話をしていた。【俺】はその二人を見て、ある事を考えていた。話が終わったのか、一人の研究員が部屋から出ていった。

「それじゃ今から、脳波を検査をするからそのままベットに横になってくれないか？・・・大丈夫。只、異常がないか調べるだけだから。」

【シーナ】は、警戒している【俺】に優しく言葉をかけて和らげようとしてくれた。【俺】は【シーナ】の言葉を信じてベットに横になった。【シーナ】は俺の頭に何かを被せると隣りにあるモニターのスイッチを入れた。そこには、何やら赤と青と黄の線が縮小しな

がら動いていた。【シーナ】はモニターをジッと見て、紙に書いていた。

「あの・・・」

「ん？どうした？」

「・・・どうして【俺】に【謝った】のですか？」

「え・・・」

あの時、【シーナ】が俺に手を差し伸べた時、【本当にすまない。不自由な君達にこんな事をしてしまって・・】と言っていたのだ。その言葉は【俺】の心臓辺りに吸い込まれるように【聞こえたのだ。】次に俺は、出て行った研究員の言っていた【言葉】を【シーナ】に伝えた。

「【シーナ】さん。貴方はもしかしたら【良い人】だと思うので言いますが、さっきの人は【シーナ】さんの事が嫌いらしいですよ。それに【俺】の事を【気味悪い顔しやがって】と言ってました。」

【シーナ】は【俺】の言っている事を理解したのか今度は【口を動かさず】に【俺】をジッと見ていた。しかし、【俺】は【シーナ】が【声を出しているように言っている事がわかった。】

「・・・【僕の名前はシーナ・カオル。】」

【シーナ】は、目を輝かせて頷いた。

「す、凄い・・・君は【人の心】を読む事が出来るのか？」

「そうなんですか？・・・所で【心】ってなんですか？【名前】ってなんですか？」

その頃の【俺達】は言葉は知っていた。話しながら歩いている研究員から学んだものだが、その言葉の【意味】を知る事は無かったのだ。その時の俺は純粋に聞いただけなのに【シーナ】は急に悲しそうな顔をした。

「そうか。君達は教育を受けていなかったんだったな・・・すまない。僕のせいで・・よし！これから君は毎日、僕の部屋に来なさい。君に【知識】と【世界】を教えよう。」

こうして、【俺】は【シーナ】のいる部屋を自由に行くことになった。そして、【俺】はそこで自分の【名前】を知って、【シーナ】がやろうとしていた事をする事になるが、これは【俺】自身も望んだ事だった。

♪♪♪

【シーナ】のいる部屋まで行くのは大変だった。研究員達に見つからずに、【シーナ】のいる所まで行かなければならないのだ。【俺】は【忍者】のように研究員の【足音】や【心の声】を聞きながら、闇の中を潜って行き、【シーナ】のいる部屋まで行った。

【シーナ】によると、この【施設】では【俺達】は戦争の道具として、作られた【人間】らしく、【薬品】を注入する事で【俺達】を【強化人間】する【施設】らしく【俺】は、その【第十号】らしい。

【俺】と同じ【能力者】に【シーナ】はあった事があるが皆何かしら【異常】があったらしく【俺】のように【正常】な【能力者】はいないらしい。なら、【俺】と【九人の能力者】以外の【仲間】はどうなったか【シーナ】に聞いてみると【シーナ】は暗い顔をした。

【俺】はわかっていた。研究員の【心】をある程度聞いていたので、【力を持たない仲間】の末路を研究員から【聞くことが出来たからだ。】

「【アガレス】。君以外の【能力者】は君みたいに賢くないが、皆何かしらの問題を抱えているんだ。だから、【アガレス】。君は悲しまなくて良いんだ。悪いのは僕なんだ。僕の心が弱いばかりに・・・」

【シーナ】は俺をなぐませてくれた。【俺】は【シーナ】からいろんな事を学んび、それは、【俺】に【力】を与えてくれた。だから、【俺】は【シーナ】のやろうとしている事を実現させる為、【九人

の能力者】に会いに行こう。この【作戦】を成功させる為には【仲間】が必要なのだ。だから、少しだけ【シーナ】には苦労をかけてしまうが、我慢して欲しい。【俺】はそう心に誓った。

◆◇◆

【俺】の名前は【アガレス】。今はあの時、【シーナ】と始めて出会った部屋のベットに横になり、【シーナ】から貰った【懐中時計】を研究員にバレないようにチラリと見て、その時を待っていた。研究員達は真夜中でも廊下を行来していたが、昼よりは【回数】は極端に少ない。その代り、この時間帯は警備兵が銃を持って巡回している。しかし、その【ルート】は単純で【俺】は通る時間帯を覚えた。何故【単純】なのかと言うと、この部屋の耐久性にある。この部屋はどんな衝撃や音でも、壊れないし、通さないのだ。そして、時計が【2時】を指した時、扉が開き中から【シーナ】が現われた。

「・・・本当に行くのか？」

「はい。【仲間】は必要ですからね。」

「そうか・・・なら早く行こう。最初の【能力者】に・・」

【俺】は【シーナ】の後ろを付いて行き、最初の【能力者】に会いに行った。名前は確か【ウィネ】と言う、【俺】より二コ下の男で、俺の隣りの部屋にいる男だ。

プロローグその2

俺は窓越しに【ウィネ】を見ていた。【俺】と同じ部屋の造りで、【ウィネ】はベットに震えながら体育座りをして、爪をかじっていた。髪は淡い緑色でまだ幼い顔に似合わず、目の下にはくまができていた。

「【ウィネ】君が【第一号】の【能力者】なんだ。しかし、彼は心を開いてくれなかった。それに彼は何かに怯えているんだ。」

「えぇ。わかります。心を読みましたからね。【ウィネ】が何に怯えているのかが、【俺】にはわかります。・・・それじゃ、行きましょうか。」

「大丈夫なのか？それに【ウィネ】の【能力】は【僕】は知らないんだぞ。見た事がなかったから・・・」

「大丈夫です。なんとかなります。」

【俺】は【シーナ】からＩＤカードを借りると、扉の差込み口に入れた。【ピピッ】と機械的な音を発てて、扉が開いた。【俺】が中に入った時、【ウィネ】は【俺】を見ていた。それはそうだ。【俺】と【ウィネ】は全く同じ服を来ているのだ。研究員の白衣しか見た事がない【ウィネ】にとって【俺】の【服装】は【ウィネ】の【心】

をほんの少しだけ変わらせる事が出来た。なんとも単純だが、それがいいのだ。【ウィネ】の【心】を和らげるには丁度よいのだ。

◆◇◆

【僕】はどうして、【生まれて来たのかな？】あの【研究員】は【生きる為だ】って言ってたけど、何故【生きなくちゃいけないの？】【僕】は怖いんだ。毎日毎日、同じ部屋に閉じ込められて、毎日毎日、同じ検査をさせられて、【僕】は一体何故【存在】しているのか、わからない。毎日が怖い。意味もなく【僕】は爪をかじり、毎日を過ごしていた。それに、【僕】以外の人達は一体どうなったの？【研究員】の人はその事を話さなかったけど、【生きているの？】。【僕】は只、知りたいだけなんだ。【生きる】の【意味】を知りたいだけなんだ。それさえ、わかれば【僕】は何もいらないんだ。

その時、【僕】の部屋の扉が開いた。

また、検査か・・・と【僕】は思い、扉を見た。入って来たのは、【僕】が知っている研究員の人だ。だけど、もう一人は顔が白く、【僕】と同じ服を着た人だった。【僕】は【知ったんだ】。【僕】は【一人じゃない】てことを。少しだけ【僕】は楽になったかもしれない。その人は【僕】の顔をまじまじと見ると、【僕】にこう言った。

♪

「寂しかったろう。」

その人の言葉は【僕】の心臓辺りに響いていった。
その言葉で【僕】の【心】はまた和らいだ。
【寂しい】という言葉の意味を知らない【僕】にとってその言葉は新鮮で、始めて聞いくその言葉に【僕】は色々な感情が込み上げて来た。その人は自分を【アガレス】と名乗り、扉に寄り掛かっている研究員を【シーナ】と読んでいた。【アガレス】は【僕】を【ウィネ】と呼び、その言葉は【名前】と言い、【俺達が存在する確かな証拠。】と言った。

「【証拠】って・・・なに?」

いつの間にか【僕】は爪をかじるのを止めて、【アガレス】の言葉を夢中になって聞いていた。
【僕】が何気なく考えていた【気持ち】には、【言葉】と【意味】があり、【生きている】。それが【証拠】だ。と【アガレス】は言った。【僕】は最初、【アガレス】が言っている【意味】がわからなかった。しかし言葉が【生きている】と言う事は【僕】自身【生きている】。だから、それが【僕】が【生きている証拠】になる事が少なからずわかった。また【心】が和らいだ。そして【アガレス】は【シーナ】を呼んだ。【シーナ】が【アガレス】の隣り来ると【アガレス】はこう言った。

「俺も最初、【言葉】の【意味】を知らなかったんだ。だけど、【シーナ】に出会って様々な【言葉】を教えてもらったんだ。」

知らなかった。【アガレス】も【僕】と同じように最初は【意味】を知らなかったのだ。もしかしたら【アガレス】も【生きる意味】を最初は知らなかったのではないのか。【僕】はそう思った。

「そう。【俺】も・・・もしかしたら【ウィネ】と同じように【生きる意味】を知らないかもしれないな。」

【アガレス】はまるで【僕】の【考えている事がわかっている】のかそう言った。

「だけど【生きる意味】を知るには、【俺】と【ウィネ】はまだ【若すぎる】。だから【ウィネ】、今は少しだけで良いんだ。【俺】が思うに【生きる意味】は【知る】んじゃなくて、【体験】する事だと思んだ。【ウィネ】は今、どんな事を【体験】したい？」

【アガレス】は【僕】の顔をジッと見つめていた。【僕】は考えていが、何も浮かばなかった。【アガレス】の【言葉の意味】はなんとか理解出来るんだ。只、【僕】自身【何を体験したいのか】わからなかった。不意に【シーナ】は【アガレス】にこう言った。

「他の研究員はいいとして、警備兵・・・お前がいない事に気付くんじゃないのか？」

「大丈夫ですよ。警備兵はこの施設で【何をしているのか】全く知らないんです。だから、【俺】が部屋に居なくても警備兵は研究員に連れて行かれたと思うだけです。彼らは【傭兵】みたいなものですからね。」

「そうなのか。それは【知らなかった】」

「【シーナ】にも【知らない事】があるんですね。」

「【僕】だって、【知らない事】だってあるよ。【世界】の全てを知らないようにね。」

【僕】は二人の会話を聞いてある事を思った。この二人は【僕】がこの部屋から出た事がないのに、二人は【僕】の知らない場所を知っている。それに、二人はまだ【知らない事】があるかもしれない。それに【世界】って何？【シーナ】の話を聞いていれば【世界】はもしかしたら【偉大】な物かもしれない。【僕】は【僕の知らない事】【生きる意味】そして【世界】を知りたいのだ。

「【僕】も知りたい・・・【僕の知らない事】【生きる意味】・・・【世界】を知りたい。だから、この部屋から出て、二人と同じ所に

行きたい。」

【アガレス】は唇を吊り上がらせた。この【行為】を【僕】は【知らない】。だから【知りたい】。

「【世界】は【知る】よりも【見て感じる】のが一番良いんだ。・・・【見る】とか【感じる】の【意味】を知らないかもしれないが、それは【シーナ】から教えてもらってくれ。【俺】も大体な事しか知らないからな。」

「【アガレス】。俺も大体な事しか知らないぞ？」

「それだけで良いんです。そこからは自分で【考えるしかない】・・・ところで【ウィネ】。どうして、【ウィネ】の【考えている事がわかるか】知っているか？」

【アガレス】の説明によると【アガレス】は他人の【考えている事】がわかるらしい。そして、【僕】にもその【能力】があるらしいのだが、【僕】は自分の【能力】には気付いていなかった。

「わからないよ・・・【僕】が【能力者】だなんて始めて聞いた・・・」

「【ウィネ】。君は知らないかもしれないが、【俺達】は【人間】と言ってね、【人間】には【自己防衛】って言う【能力】を最初から持っているんだ。そして・・・」

説明をしながら、【アガレス】が【僕】の方に近付いて来た。そして、いきよいよく拳を振りかざし【殴って】来たのだ。【僕】は何も出来ずにその拳を見ていた。徐々に近付いて来る拳に【僕】はある【感情】を【覚えた】。そして、拳が【僕】の顔面を捕らえようとした時、鈍い音がして【アガレス】の表情が崩れた。

「【アガレス】！大丈夫か？」

【シーナ】が心配そうに【アガレス】に近付いて行った。【アガレス】は表情を歪ませながら、【僕】の目を見た。

「わかるか？【ウィネ】。それが君の【能力】だ。君の頬を触ってみろ。」

【僕】は【アガレス】に殴られた所を触った。そこだけ、【冷たく】【固かった】。その【冷たさ】は【僕】が感じた事ない【冷たさ】だった。

「これは・・・【僕】の【能力】？凄く【冷たいよ】。それに【固い】。」

「【冷たい】と【固い】の【意味】はわかるんだな。そう、それが【ウィネ】の【能力】だ。それは【氷】と言ってな、水という液体が固って出来る固体なんだ。【ウィネ】からでは見る事が出来ないが、【俺】から見ると、【氷】の壁が【ウィネ】の頬を分厚く覆っているぞ。」

【アガレス】は殴った拳をかばいながら、そう説明した。【僕】の能力が【アガレス】の拳から守ってくれたんのかな？なら、何故【アガレス】は僕を【殴った】のかな？

「【ウィネ】が【能力】を使う事が出来たのは、【俺達】が最初から備わっている【自己防衛】が【ウィネ】の【能力】として使われたからだ。・・・後の事は【シーナ】から聞いてくれ。【シーナ】。研究員が近付いて来る。隠れるぞ。」

そう言うと、二人は急いで窓ガラスの影に隠れた。何故、そんな行動をしたのか【僕】はわからなかった

「・・・行ったか？【アガレス】」

「・・・・はい。もう大丈夫です。【心の声】が遠ざかって行きます。」

二人が元の位置に戻って来たので、【僕】は質問をした。【あの行動の意味】を知りたかったのだ。【アガレス】の説明によると【シーナ】は【僕達】を自由にする為に、【革命】という【行動】を起こそうとしていた。しかし、それには【仲間】と言う物が必要らしい。【僕】は思った。【僕】も【自由】と言う【行動】をしていいのか思った。

「【ウィネ】。君にも【自由】になる【権利】があるんだ。だから【ウィネ】、君も【俺達】の仲間になって欲しい。【ウィネ】の知りたがっている事を【自由】になればわかるかもしれない。」

その言葉の【意味】の殆どを【僕】は知らない。だけど【アガレス】。僕はもう【決めているよ】。【僕】は【世界】も【生きる意味】も【言葉】も全て知りたい。だから、二人に付いて行きたい。そうすれば【僕】は知る事ができるんだ。

「そうか・・・ならこれから【俺達】は【仲間】だ。よろしく。」

【アガレス】は【僕】に手を差し伸べた。その行動を【僕】は知らないが、【アガレス】が教えてくれた。それは【握手】と言って、【挨拶】をするのに欠かせない【行動】らしい。【僕】も【アガレス】と同じように、手を出して握った。まだ赤く腫れていた【アガレス】の手は【僕】の【能力】とは全く違った感触がした。

♪♪

「【僕】も行って良いですか？」

【俺】と【シーナ】が次の部屋に行こうとした時、【ウィネ】が付いて行きたいて言って来た。【俺】はその申し出てを快く承諾した。【ウィネ】はベットから降りると、【俺達】に近付いて来た。【ウィネ】の身長は【俺】よりも低く、幼さい顔がとても愛くるしかった。それに、【ウィネ】はもう爪をかじっていなかった。寂しがり、自分を【戒める】事をしなくなった【ウィネ】は変わったのだ。

【俺】は警戒しながら、扉を開けると廊下に出た。始めて見る【部屋の外の世界】を見て、【ウィネ】はキョロキョロと辺りを見ていた。扉が締まると、【シーナ】はその扉に何かをはめた。それは他の研究員に伝える為の、印だ。【シーナ】は研究員達に【僕自身で調べたい事があるから、この印が付いている能力者は僕の部屋にいる】という印なのだ。それをはめて、【俺達】は次の【能力者】に会いに行こうとした。その時、廊下の奥から凄まじい爆発音が聞こえ、揺れた。【俺達】はその揺れに耐えるように壁に手を付けていた。廊下の灯が消えたと思うと、赤く、まるで何かに【警戒】するような灯が照らされていた。

「【シーナ】さん！これは一体！」

「わからない。だが、何か【悪い事】が起こりそうだ。」

「待ってください！・・・いけない。【シーナ】さん！研究員やら警備兵がこっちを通ります。ひとまず部屋の中で隠れましょ。」

【俺達】は急いで、部屋のロックを外すとなだれ込むように入り隠れた。数秒後、部屋の前の廊下を研究員やら警備兵やらが、慌ただしく走っていた。【俺】と【シーナ】は黙って窓ガラスの影に隠れて、【ウィネ】にはベットに行かせて、部屋の中には【ウィネ】一人だけに見せた。【ウィネ】は不安げに【俺達】を見ていた。

「【アガレス】。皆、なんて言ってんだ？」

「待ってください【シーナ】さん。今、聞いていますから・・・」

【俺】は研究員の【心】を読み取ろうとしたが、一緒に警備兵の【心】を読み取ってしまうので、手間取った。殆どの人は【何が起きたのか】全く理解していなかったが、【一人だけ】重大な事を【心の中】で考えていた。俺はその一人に集中して【能力】を使い、読み取る事が出来た。

「【シーナ】さん。【第五研究室】で何かあったらしいですよ？」

「第五研究室・・有り得ない、そこはもう使われていないんだ。・・・行ってくる。」

【シーナ】が立ち上がろうとしたので、【俺】は【シーナ】の袖を

掴み、止めた。

「駄目です。心を読んでわかったんですが、【ただならぬ雰囲気】がありました。今、【シーナ】さんが【いなくなれば】どうするんですか？」

「だ、だが・・・」

「今、この部屋を出ると、怪しまれますよ？【あっち】から見れば、【シーナ】さんが突然この部屋から現れるんです。わかりますよね？この窓ガラスはこの部屋から見ると【鏡】ですが、【あっち】からは【部屋の中を確認する事ができます】。だから、【今、出るのはまずいんです】。」

「なら・・・どうするんだ？」

「研究員と警備兵がまだ廊下にいます。少なくなったら行きましょ。【俺】も興味があります。その【第五研究室】に【俺達】も行きたい。ついでに、残りの【能力者】にも会いに行きましょ。」

【俺】は知りたかった。この研究室の全てを知りたい。それは【ウィネ】も同じだった。【俺】が【ウィネ】の方を見ると、【ウィネ】の【心の声】がわかった。【ウィネ】も行きたがっていた。

♪♪♪

突然の爆発音に【俺】は驚いた。
【俺】は自分の部屋で仮眠を取ろうとしていたのだが、その時、あの爆発音が聞こえて来たのだ。【俺】は驚き、立ち上がろうとした時に今度は、大きな揺れが【俺】を襲った。【俺】はよろめきベットに横たわると、今度は机の上に置かれてあった資料が床に落ち、パソコンが床に鈍い音を発てて落ちた。そして、揺れがおさまると俺は急いで、パソコンを持ち、起動させようとしたが、起動しなかった。

「くそ！・・・何なんだあの揺れは・・」

今度は【俺】の携帯電話が鳴った。【俺】は携帯を手に取り、画面を見た。画面には、助手の名前が表情されていて【俺】はすぐに携帯のスイッチを入れると、耳にあてた。

「どうした、何があった。」

「大変です！【アモン】教授。【第五研究室】で、【試験体】が突然、暴れ出したんです！」

「何！・・・わかった、すぐに行く。お前は警備兵に連絡しろ・・・殺しても構わない。」

【俺】は携帯をきると、急いで部屋を出た。廊下では、研究員と警備兵が慌ただしく走っていた。【俺】も急いで、【第五研究室】に向った。出来れば、アイツにはこの騒ぎで、鉢合わせにならないようにしたい。【シーナ】にだけは、知られてはいけないのだ。【第五研究室】の事に気付かれてはいけない。【俺】は【能力者がいる部屋】を抜けると、エレベーターに乗り、【第五研究室】に向った。

◆◇◆

「少しおさまりましたね。それでは、行きましょか。」

【俺】は辺りを警戒しながら、扉を開いた。【俺】と【シーナ】と【ウィネ】の順番に廊下を出た。誰もいない廊下は静かで、不気味だ。

「【シーナ】さん。【第五研究室】の場所はわかりますか？」

「あぁ、こっちだ。」

【シーナ】を先頭に【俺達】は【第五研究室】がある場所に向った。他の【能力者】は後で会いに行こう。今は、【第五研究室】に【向かいたかった】。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2979d/

レボルーション・エース

2010年10月28日07時16分発行